

## 「名詞 à 不定詞」型名詞句の意味論

奥田智樹 (名古屋大学)

本発表は、フランス語で多用される「名詞 à 不定詞」(以下 N à V と略記) 型名詞句について、主に意味論的な特質を明らかにすることを目指す。N à V は非常に多義的な表現だが、主に Sandfeld (1965) に依拠して、その意味や用法を(1)「義務および可能」*travail à refaire* 型、(2)「結果」*soleil à faire fondre le chocolat* 型、(3)「方向性①」*machine à laver* 型、(4)「方向性②」*homme à tout faire* 型、(5)「方向性③」*aptitude à faire quelque chose* 型の5つに分類した。(1)のタイプはNが主語となりà Vがその属詞となる構文(N est à V)と関連付けて議論されることが多い(*C'est un travail à refaire.* / *Ce travail est à refaire.*)。しかしこの両者には、前者が可能の意味を明確に持ち得るのに対し、後者はその意味が明確になりにくいという違いがある。また、(1)は唯一否定形N à ne pas Vの形を許容する点でも特徴的であり、その意味は常に否定の義務(禁止)になる。しかし、対応するN est à ne pas V およびN n'est pas à Vについては、前者の意味が常に否定の義務になるのに対して、後者の意味は否定の義務、不可能、義務の否定の間で曖昧になることがあるという違いがある。(2)のタイプには、比較的成句化した表現も多く含まれる。この場合のà Vは、文末で副詞的に用いられ、その前の部分全体を修飾するà V(*Il fait chaud à faire fondre le chocolat.*)との連続性において捉え得るものである。そのことによって、この場合のNで表されている対象は、「もの」ではなく「事行」としての解釈が可能となっている。本発表では、これら2つ以外に、それぞれに特徴的な(3)、(4)、(5)のタイプについても検討する。

Sandfeld, Kr. (1965) *L'infinitif (Publications romanes et françaises ; 83. Syntaxe du français contemporain)*, Droz.